

ふるさとへぐり再発見

三里古墳

12



竜田川の東岸、[長屋王墓](#)の東約300m付近、矢田丘陵より派生する屋根上に築かれている古墳です。

昭和50年の1、2月にかけて奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査が実施され、多くの成果が得られました。

古墳の外形は大きく変形されており、はっきりしませんが、北東に前方部を向けた全長35m、後円部径22m程度の前方後円墳の可能性が考えられています。

主体部は南西に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室長4.9m、幅2.4m、羨道長約7m、幅は1.3～1.4mです。残念ながら第2次大戦の直後に石室の石が建築材に転用され、石室の天井や壁の上半がなくなっています。このため、今では玄室・羨道の高さは分かりませんが石室の平面規模は平群谷でも大きい方です。玄室奥壁には板石を使って棚をつくっており、これは大和では三例しか知られておらず、珍しいものです。紀氏の勢力下の紀ノ川流域の古墳に多くみられ、[三里古墳](#)も紀氏とのかかわりが注目されています。

玄室内には二上山より運ばれた凝灰岩の組合家形石棺が納められ、羨道奥にも組合箱形石棺が追葬されています。また、玄室奥の石棚の上下や羨道前部にも木棺が数回追葬されたとみられ、鉄釘・刀子等が出土しています。

以前にも書きましたが、[三里古墳](#)は横穴式石室の特徴である家族墓的な性格が良く分かる例で、石室を数回にわたって開口し、追葬したことが確認されているのです。

そして、石室内より多くの副葬品が出土しています。

石室の上半がすでに無くなっており、遺物の出土はあまり期待されていなかったのですが、調査の結果、[馬具・武具の他、須恵器・土師器等](#)が多く出土しました。

